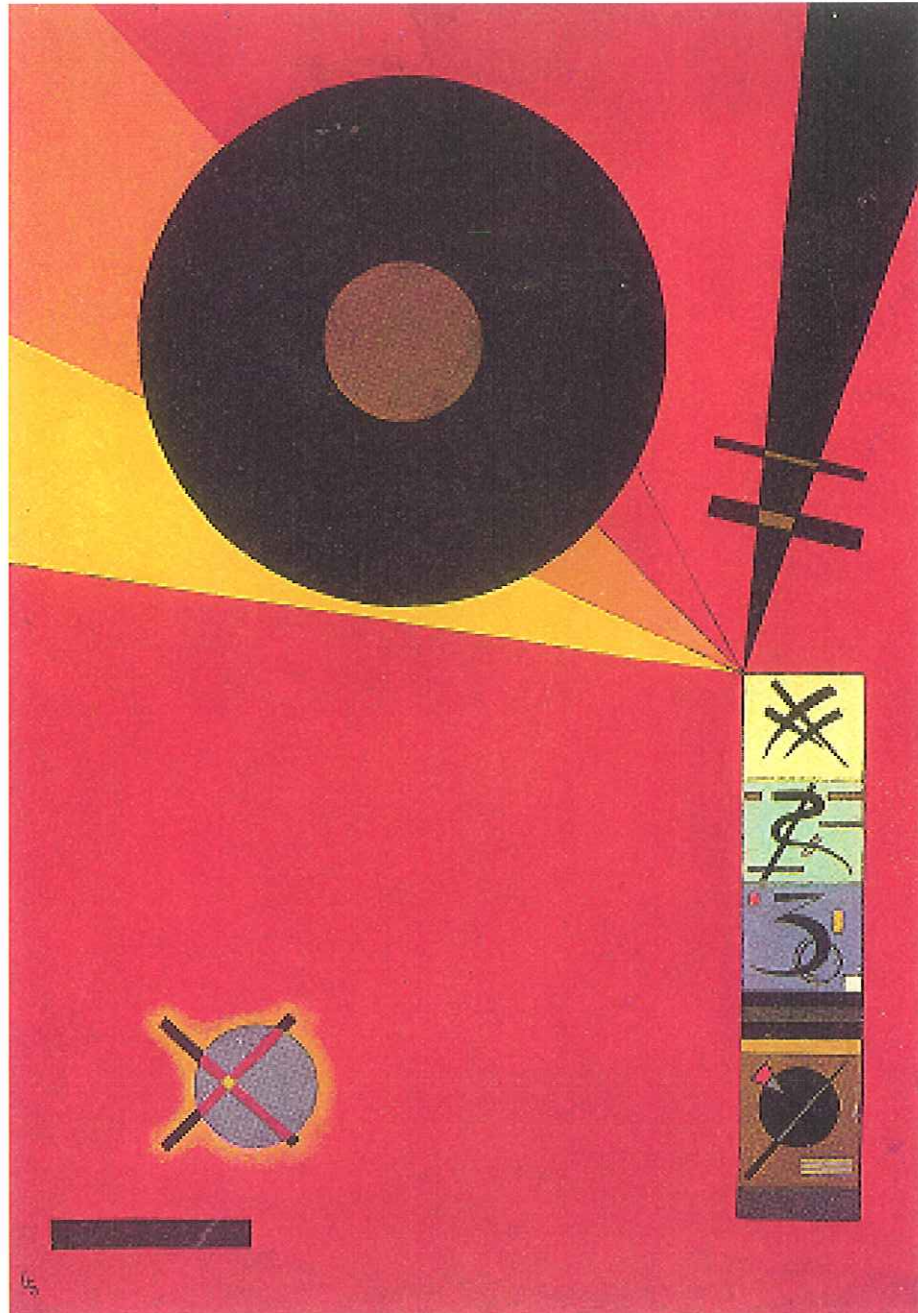


地域再生 seminar

鳴子町における温泉地再生と活性化の取り組み



KLEINE ZEICHEN, 1923 Wassily Kandinsky

2006/3/10 宮城県鳴子町鬼首 ホテルオニコウベ
宮城県鳴子町/NPO 法人健康と温泉フォーラム

CONTENT/目次

開催要項、プログラム/1

主催者あいさつ/2

講演レズメ-特別講演/4

講演レズメ-パネルディスカッション/5

資料/10

開催要項

- 主催 鳴子町、NPO法人健康と温泉フォーラム
- 後援 内閣府、宮城県
- 開催日 平成18年3月10日(金)
- 開催場所 リゾートパーク・ホテル オニコウベ

〒989-6941 宮城県玉造郡鳴子町鬼首字大清水26-17 TEL: 0229-86-2011

プログラム

1400 開会式

主催者挨拶

高橋勇次郎/鳴子町長

白倉 卓夫/NPO法人健康と温泉フォーラム 会長

来賓挨拶

小林 健典/内閣官房構造改革特区推進室・地域再生推進室参事官補佐官

小泉 保/宮城県企画部地域振興課課長

1430-1515 特別講演

三友 紀男/社団法人全国社会保険協会連合会 仙台社会保険病院 病院長

1515-1530 休憩

1530-1730 パネルディスカッション 「鳴子町における温泉地再生と活性化の取り組み」

コーディネーター

奥村 明雄/NPO法人健康と温泉フォーラム 副会長

パネラー

杉尾伸太郎/株式会社プレック研究所 代表取締役社長

檜原多計志/(社)共同通信社 論説委員

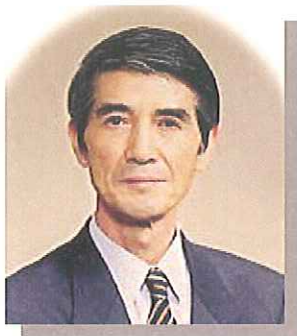
成川 弘治/保険医療福祉総合センター町立鳴子温泉病院 院長

大山 厚昭/鬼首温泉 旅館かむろ荘経営者、鬼首公民館長

1730 閉会

1740-2000 交流レセプション

主催者あいさつ



高橋勇次郎 鳴子町長

古川高校を卒業後に、役場職員となる。総務課長、助役を経て、平成7年に鳴子町長に就任。現在3期目となる。

趣味は山歩きと川釣り。特に鮎の友釣りと溪流釣りを大得意とし、以前は地元の川以外にも県外の多くの川に遠征し、釣り三昧の生活を送る。

しかし、町長となってからは、公務優先の毎日で、平成7年の町長就任直前に購入した自慢の名前入りの鮎竿は、一度も振ることなく、眺めるとけとなっている。

昭和9年10月1日生まれ 70歳。

本日は、遠路はるばる、ここ鬼首にお出でいただき感謝申し上げますと共に、歓迎致します。

さて、本日は、内閣府の方々及び宮城県の方々をご来賓にお招きし、温泉に関するセミナーを開催することは、温泉観光地「鳴子」として大変光栄に思っています。また、特別講演として、三友先生のご講演を賜りますことに対し、深く感謝申し上げます。

鳴子町は、昨年、温泉を核とした地域再生計画「鳴子いきいき療養プラン」を策定し、国より承認を受けています。この計画は、温泉観光地の再生を図ることが最終目的として策定されており、その一環として今回のセミナーを開催するものです。また、このセミナーは、内閣府のモデル事業に採択されたもので、温泉をテーマとし、温泉地が抱える諸問題の解決及び活性化をどのように図るかを模索し、あるいはヒントを探ることが目的で開催されます。参加者の皆様には、温泉にお詳しい方もおられると思いますので、ご意見などをいただければ幸いです。

主催者あいさつ



白倉 卓夫 NPO 法人健康と温泉フォーラム 会長

群馬大学大学院修了後、西独ゲッチンゲン大学に留学。群馬大学教授、群馬大学草津分院長を経て、現在、東京都多摩老人医療センター名誉顧問。この間、ギーゼン大学(バート・ナウハイム)に短期留学(文部省在外研究員)。日本温泉気候物理医学会会長(平成6年)を歴任。温泉関連著書に「温泉・お風呂健康法」保健同人社、「体と心に効く入浴健康術」同文書院、「草津温泉」草津町温泉研究会。「医者がすすめる驚異の温泉」小学館など。

私共、NPO法人健康と温泉フォーラムは、1986年に愛媛県松山市で「温泉と現代社会」をテーマにフォーラムを開催して以来、全国の温泉関係者のご支援を得て、これまで、20年余り、全国各地で、健康と温泉をテーマにフォーラムを開催するほか、温泉関係者の情報交換、外国の温泉関係者との交流、調査研究等各種の事業を展開して参りました。

その間、私共は、欧米の温泉地の状況を紹介しつつ、温泉の健康、保養、休養への活用を訴えて参りました。最近では、従来の歓楽型の温泉地の行き詰まりに対する反省が生まれ、健康と保養のための滞在型温泉地を志向するところが増えつつあることは、大変喜ばしく感ずる次第であります。

今回、私共は、内閣府の助成を頂くとともに、鳴子町、地元温泉関係者の方々のご支援とご協力を頂き、温泉の医学的、科学的知見の集積と全国的なネットワーク化を目指し、その拠点としての「温泉アカデミー」を構想し、鳴子温泉郷の優れた特質を生かした発展に貢献できないかと考え、その可能性について調査研究を行っているところであります。

本日のセミナーも、内閣府と、鳴子町のご支援の下で、その事業の一環として開催するものであります。本日のセミナーを通じ、ご出席の専門家の方々と地元の皆様の活発なご議論が行われ、鳴子温泉郷の再生と活性化へ向けて論議を更に深める一助となることを期待するものであります。

講演レズメ

特別講演 「鳴子温泉での温泉医学研究の歴史と展望」



三友 紀男 社団法人全国社会保険協会連合会
仙台社会保険病院病院長

略歴

昭和 42 年 東北大学医学部卒業
昭和 50 年 東北大学講師(鳴子分院内科)
昭和 53 年 国立鳴子病院内科医長
昭和 54 年 リーズ大学(英国)リウマチ学教室にて研究
昭和 57 年 東北厚生年金病院リウマチ膠原病内科部長
平成 3 年 同 主任部長
平成 11 年 同 副院長
平成 14 年 仙台社会保険病院院長就任

資格

- ・日本内科学会東北地方会評議員 認定内科医
- ・日本リウマチ学会評議員 指導医
- ・日本結合組織学会評議員
- ・日本温泉気候物理医学会理事 認定医
- ・宮城県自然環境保全審議会専門委員

講演要旨

1. 温泉医学研究の萌芽
2. 鳴子分院の発足(昭和19年)
3. 温研の研究の進展
4. 東北地方における湯治概要調査成績

5. 湯あたりの研究
6. 温泉作用
7. 非特異的変調作用
8. 鳴子分院発表論文数の推移
9. 温泉保養地構想
10. 湯治の実態
11. 温泉の保健的利用
12. 国民温泉地制度不成功の理由
13. 保養温泉地の医学的条件
14. 温泉保養地の計画のあり方
15. 保健的利用促進のための諸問題
16. 外来リウマチ患者からみた温泉治療の実態
17. 温泉療法無し群(112例)について
18. 滞在期間と効果
19. 機能分化させた温泉施設の整備
20. 国立鳴子病院と農民の家
21. 構造改革の嵐
22. 温泉の保健的利用への追い風
23. ネットワーク
24. 顧客の目は厳しい
25. しかし、日本人は温泉好き

「鳴子町における温泉地再生と活性化の取り組み」

コーディネーター



奥村 明雄 NPO 法人健康と温泉フォーラム副会長

昭和 17 年生まれ。昭和 40 年京都大学経済学部卒業後、厚生省に入省。厚生省では、主として、医療・保険行政を、環境庁では、大気保全、自然保護、人事の各行政を担当。平成 3 年社会保険庁運営部長、同次長を経て、平成 5 年環境庁自然保護局長に就任。平成 7 年退官。同年厚生年金基金連合会専務理事に就任。平成 13 年退職。同年より(財)年金総合研究センター専務理事。平成 14 年(財)日本環境衛生センター専務理事に就任。現在に至る。

最近の趨勢を見ると、温泉地の数は増え、都心近くでも温泉が楽しめる「温泉ブーム」が到来したかのようである。他方、温泉地は、観光客の減少とともに、経営に四苦八苦しており、むしろ疲弊しているのが現状である。旅行の個人化、家族化が進み、高齢者を中心に、温泉志向は高まり、ゆったりした滞在型の利用への萌芽が見られつつあるが、観光地はこれに適応できているとは言いがたい。まづかに迫っている超高齢社会は、健康志向を高め、健やかに老いることへのニーズを高めているが、温泉地はこのようなニーズに応えているだろうか。

温泉地を取り巻く変化の中で、いかに温泉地の再生を図り、温泉地の活性化を進めていくか、多くの温泉地関係者が頭を抱え、様々の模索を続けている。ここ、宮城県鳴子温泉郷においても同様であろう。

鳴子温泉郷は、背後に栗駒国定公園を控え、豊かな

自然とゆったりした田園景観に恵まれているほか、なんと言っても、5つの温泉地を抱え、日本にある泉質 11 種のうち、9種が揃っている特異な温泉地であり、湯量も極めて多く、全国屈指の温泉地としての素質に恵まれているといつてよい。しかし、鳴子温泉郷の関係者の努力にもかかわらず、温泉地としてのこのような優れた特質を十分に生かしきれているかどうかは疑問なしとしない。

古来わが国の温泉地は、労働の合間の疲労の回復と家族団らんの「湯治」の場として、活用されてきた。ここでは、長期滞在とゆったりとしたリフレッシュが期待されてきたはずである。しかし、高度経済成長の中で、温泉地は、歓楽型の温泉地へと変貌し、社会的ニーズの変化とともに、新たな形での「湯治場の復活」が期待されている。

鳴子温泉郷は、湯治場の伝統を残している数少ない温泉地の一つであり、最近では、町立温泉病院と連携し、これを現代的な形で発展させようとする地域での動きが盛り上がりつつある。また、鳴子町には、かつて東北大学の温泉研究施設が存在し、地域の発展の大きなバックボーンを形成していた。鳴子温泉郷の再生と発展を考える際、このような歴史や温泉の特質を充分活用することをキーワードとしていくことが望ましいと考える。

私共は、今回、内閣府、鳴子町、地元関係者などのご支援を得て、温泉の医学的、科学的知見の集積と全国的なネットワーク化を目指し、その拠点としての「温泉アカデミー」を構想し、鳴子温泉郷の特質を生かした発展に貢献できないかと考え、その可能性について調査研究を行っているところである。本日のセミナーも、その一環として企画したものである。本日のパネルディスカッションでは、幅広い専門家のご参加を頂き、地元の皆様とともに、鳴子温泉郷の再生と発展のあり方について考え、論議を深められることを期待したい。

講演レズメ

パネラー



杉尾 伸太郎 株式会社プレック研究所代表取締役社長
NPO 法人健康と温泉フォーラム常任理事

昭和 12 年 4 月 1 日生まれ。昭和 35 年京都大学農学部林学科(造園学専攻)卒業。厚生省国立公園部、鹿児島県観光課、環境庁自然保護局を経て、昭和 47 年株式会社プレック研究所設立、代表取締役社長、現在に至る。武蔵野美術大学非常勤講師、長岡造形大学非常勤講師等歴任。平成 10 年-12 年イフラ(国際造園家連盟)副会長。

【公職】イコモス歴史的庭園・文化的景観国際分科会 副委員長、日本代表。ジャパンイフラ会長、日本イコモス国内委員会副委員長、NPO 法人健康と温泉フォーラム常任理事等。

【著作・作品等】「造園の歴史と文化」(共著)養賢堂、「鳴子・栗駒・小安峡」共著。「これからの国土・定住地域づくり」(共著)鹿児島出版会、フロアリード(国際園芸博オランダ)政府出展(日本庭園設計)等。

この地域の活性化を考えるに当たって最も大切な点は、この地域が優れた自然環境と景観、それに温泉等の豊かな資源に恵まれていることを充分認識し、その活用を検討するのが肝要である。

この地域の自然環境や景観が秀れている証拠は、1968 年昭和 43 年 7 月に栗駒国定公園が指定されたことで示される。このような地域に長い間にわたって地元の人々の英知を注ぎ込んでこそ、優れた地域に成長を遂げるのである。

2004 年 7 月、わが国の「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたが、その時、同時に登録になった世界遺産にムスカウ公園がある。この公園はヘルマン・ピュックラー侯爵(1785~1872)が 1815 年から 30 年をかけて計画し設計した公園であり、その後の世代で拡張され総面積は約 830ha に及ぶ。ベルリンから約 120km 現在ではナイセ川によって国境が区切られているが、ドイツとポーランドにまたがった世界遺産の公園である。広大な作りと遠方に広がる眺望、工夫を凝らした庭の構成により素晴らしい空間となっている。ピュックラーはゲーテに励まされてこの公園を作ったが、彼は「美なるものはさらに強く福祉と安寧を促進させる。有用なものうち、美なるものは有用中の有用なるものである」と云っている。

彼が手をつけるまでは、どこにでもある温泉を湧出する森と湿地と田園地域からなる、この場所が世界遺産になるには、ピュックラーという優れた造園家の出現があったことと、それを支持した多くの人々が永年にわたって育んできたものに他ならない。なお、ピュックラーの作った城を現在修復しつつあるが、当時のオランジェリ(温室)とあわせて造園の学校ができることとなっている。これらのシステムもまた、鳴子に取り入れることが可能ではなかろうか。

講演レズメ

パネラー



榎原 多計志 (社)共同通信社 論説委員

1947年、横浜生まれ(58歳)。共同通信社・編集委員兼論説委員。取材分野は社会保障(年金、医療、介護中心)。現在、年間企画「シニアの安心学」を出稿中(岩手日報などが掲載中)。

三位一体的な取り組みを

仕事柄、さまざまな地方自治体取材する機会がある。首都圏や近畿圏など大都会は別として、どの自治体に出向いても、役場には「地域活性化」を訴える看板や懸垂幕が掲げられているように思う。過疎化、基幹企業の撤退、地場産業や観光事業の不振などが背景にあり都会育ちの自分にも、地域の方々の苦悩ぶりが伝わってくる。

最近、地域活性化の具体策の一つとして「福祉」「医療」サービスを売り物に、年金生活者や健康志向の都市住民を誘致する動きが活発になっている。介護保険制度や規制改革などが後押ししている格好だが、必ずしも全てが成功しているわけではない。

マスコミ受けを狙った一時的な活況は、時間とともに衰え、やがて忘れ去られる。結果として、老朽化した巨大な施設と過大な住民負担が街に残されることになる。

活性化の「決定打」を見つけ出すことは並大抵のことではないが、福祉や医療を柱に地域を活性化させるには、「福祉だけ」「医療だけ」の単品の取り組みは概して効果が薄い。

例えば、いくら優れた医療を受けても、退院後の療養先がないようでは、容体が再び悪化しかねない。

昨今、「予防医学」「介護予防」が叫ばれているが、それらをバラバラに取り組んでも本当の効果は期待できない。福祉の街や医療の街を目指すのであれば、保健、医療、福祉を三位一体的に取り組む必要がある。

保健、医療、福祉のネットワークが整備され、住民の生活満足度が高い街は魅力にあふれている。さらに優れた環境と豊富な温泉があれば、人が寄り付かない方がおかしい。

講演レズメ

パネラー



成川 弘治 鳴子町立温泉病院 院長

昭和22年1月26日生まれ
岩手医科大学医学部卒業
東北大学医学部附属病院 脳神経内科研修医
東北大学医学部附属病院 神経内科医員
国立療養所宮城病院 第二内科医長
国立療養所宮城病院 神経内科医長
東北地方医務局業務指導室長併任
東北大学医学部講師併任
国立療養所宮城病院 臨床研修部長
国立療養所宮城病院 リハビリテーション科医長
国立鳴子病院 副院長
町立鳴子温泉病院 院長
資 格
東北大学医学博士取得
日本神経学会神経内科専門医
日本リハビリテーション医学会専門医
日本超音波医学会認定超音波専門医
日本内科学会認定内科医
日本温泉気候物理医学会温泉療法医

鳴子温泉における温泉療養

鳴子温泉郷は昔からの温泉保養地で、伊達藩が農民に湯治を奨励したり、代々、湯守という人たちがいるなど、湯治文化の伝統がありました。

その中で、「かけ(脚気)川渡、かさ(瘡)鳴子」とうたわれるほど、このあたりのお湯には経験的に効能があったとされています。今、湯治が見直されてきつつある中で、経験的に知られてきた温泉の良さに、今度は、医学的・科学的なリハビリや専門医の適切な診断と治療をプラスして、温泉に浸かりながら、通院もして改善していきましようというのが、私たちが取り組んでいる「温泉療養プラン」です。地域の湯治旅館

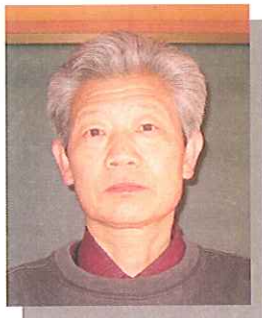
と連携して、入院には至らないような生活習慣病や腰痛、リウマチ疾患、脳梗塞後の患者さんなどに便宜を図っています。生活習慣病というのは病気ではなく、病気を作っているもとというのが医学的な見解で、生活のリズムを取り戻すことによって自分で治せる病気だと考えられています。

実際に、二泊三日や三泊四日で湯治に来て、のんびり温泉に浸かったり運動したりしていると、血糖値や血圧が下がることがあります。これは、お湯が治すのではなく、温泉をきっかけにして、ゆっくりと自分の生活のリズムを変えていった結果によるものと思われる。また、経験的効能ということでは、例えば、鉄分の多いお湯は血管の拡張作用が硫黄泉より強いとか、マグネシウムの多い湯気のほうが血圧を下げる効能があるとか、硫黄やアルカリ性のお湯は皮膚にいいというようなことがあります。あまり効能を云々するよりも、とにかく温泉に入っている楽しめようということによいと思っています。

人間は自分で体を治せる素質を持っています。温泉に浸かって「ああ、気持ちいいなあ」と感じることで、そういった素質を開花させるきっかけになればよいのではないのでしょうか。本当に日本のような温泉国はほかに例を見ませんので、自然が与えてくれた恩恵を上手に使わない手はないと思います。

講演レズメ

パネラー



大山 厚昭 旅館かむろ荘経営者、
鬼首公民館長

1945年、旧鬼首村(現鳴子町)生まれ(61歳)。
家業の旅館業を経営しながら、現在、鬼首公民館長、
文化財保護委員、社協理事、第三セクターの役員等
の役職に就いている。



このセミナーのパネラーとしてお話しする訳ですが、皆様の前でうまくしゃべれるか不安です。そこで、本日は常日頃、私が感じている「温泉」についてお話しさせていただきます。

鳴子は、5地区の温泉地から成り立ち、鳴子温泉郷として全国的な知名度を持っています。しかし、温泉は生き物といわれています。日々、十分な管理のもと利活用することで温泉本来の効能が発揮されるもので、手をかけなければ、すぐ衰退してしまいます。我々、旅館業を営む者として、温泉は無くてはならない状況です。

この温泉を将来とも利用するための保護策が今求められています。今回のセミナーを通じて、何かしらのヒントが得られればと今感じています。

- ① 鳴子温泉郷の旅館の現状と問題点
- ② 鳴子温泉郷で取り組んでいる活動
- ③ 鳴子温泉郷の再生と活性化について

資 料

宮城県鳴子町 平成18年3月31日に大崎地方1市6町(古川市、松山町、三本木町、鹿島台町、岩出山町、鳴子町、田尻町)が合併し、「大崎市」が誕生します。(平成18年3月31日より大崎市)

鳴子温泉を長期滞在のための保養地とするための基本構想

1 鳴子温泉の現状

① 町の自然的、歴史的、社会的諸条件の概要

ア) 自然的条件

鳴子町は、宮城県の北西端に位置し、玉造郡の北部一帯を占め、北西部は山形県・秋田県、東部は栗原市、南部は岩出山町及び加美町に隣接する東経140°30'、北緯38°45'、海拔160.4mに位置する総面積327.55km²の典型的な農山村地となっている。

町内には、いたるところに温泉が湧出し、豊富な温泉資源と優れた四季の景観に恵まれ、栗駒国立公園の代表的な温泉観光地として知られている。町土は、森林が全体の約87%を占め、町の中央を流れる江合川(荒雄川)沿いを中心に農用地3.7%、宅地1.0%と平地は極めて少ない。また、寒暖の差が著しい内陸型の気候を示しており、最高気温34.8℃、最低気温-14.0℃、平均気温10.2℃となっており、冬季は西北西の風が強く風速は8m~12m、夏季は東南東の風で降雨量は平均約2,015mmを記録している。冬季は11月下旬より翌年3月下旬まで続き、特に山岳地帯は、2m~3mの積雪がある。

イ) 歴史的条件

本町に、人類がはじめて文化の足跡を残したのは、紀元前2万年頃と推定されているが、藩政時代より交通の要所、優れた自然景観、鳴子八湯の名で親しまれ、豊富な温泉資源等により湯治場として栄えてきた。

現在の鳴子町は、明治22年3月31日の町村制施行により鳴子村・大口村・名生定村が合併し温泉村となり、大正10年4月21日に温泉村を鳴子町・川渡村に分村、昭和29年4月1日の鳴子町・川渡村・鬼首村の三町村合併により出来た町で、今日は、「いで湯とこけしの里」として親しまれている。

ウ) 社会的条件

本町は、県都仙台市から北方60kmに位置し、鉄道及び国道等によって結ばれ所要時間は約2時間であり、大崎広域市町村圏の中心古川市より35km、約50分の距離にある。

鳴子温泉郷は、鳴子・東鳴子・中山平・川渡・鬼首の5つの温泉から成り立ち、古くから温泉観光地として栄えてきた。湯量の豊富さと泉質の多さは国内でも有数で、この恵まれた温泉を利用した旅館、ホテル、みやげ品店等が軒を連ね温泉街を形成し、恵まれた自然環境とともに多くの観光客が訪れ発展してきた。

高度経済成長期には大規模なホテルの増改築や別荘分譲、大規模なリゾート開発が進められたが、バブル経済の崩壊とともに地域経済を取り巻く環境は大きく変わってきている。

② 温泉の泉質と湯量及び全国の特異性

昔から「かけ川渡、かさ鳴子」と言われてきたように、鳴子温泉郷は源泉ごとに泉質が異なります。日

本にある天然温泉の泉質11種類のうち、実に9種類が鳴子にあります。

疲労回復や筋肉痛はもちろん、リウマチ、糖尿病、傷など、それぞれの温泉が多彩な効能を持っており、中には「目の湯」「子宝の湯」として広く親しまれてきたものもあります。泉質を味わい尽くせるのは世界にも例のない多彩な泉質を持つ鳴子ならではのしょうか。

また、湧出量は、毎分5,500ℓと豊富で入浴以外にも道路の融雪、冬季における暖房、温泉熱利用の植物園等に利用されている。

●日本にある11種類の泉質

硫黄泉・硫化水素泉(硫黄泉)、単純温泉(単純温泉・アルカリ性単純温泉)、重碳酸土類泉(炭酸水素塩泉)、食塩泉(塩化物泉)、明ばん泉(硫酸塩泉)、酸性泉(酸性泉)単純炭酸泉(二酸化炭素泉)、重曹泉(炭酸水素塩泉)、芒硝泉・石膏泉・正苦味泉(硫酸塩泉)、緑ばん泉・炭酸鉄泉(鉄泉)、放射能線(放射能泉)

●鳴子町にある9種類の泉質

硫黄泉・硫化水素泉(硫黄泉)、単純温泉(単純温泉・アルカリ性単純温泉)、重碳酸土類泉(炭酸水素塩泉)、食塩泉(塩化物泉)、明ばん泉(硫酸塩泉)、酸性泉(酸性泉)重曹泉(炭酸水素塩泉)、芒硝泉・石膏泉(硫酸塩泉)、緑ばん泉・炭酸鉄泉(鉄泉)

※温泉の泉質は、旧泉質名を基準にしています。
()は新泉質名です。

●利用客の動向

平成16年における観光客の延べ入込数は2,176,750人で、前年の2,155,420人に比べ21,330人、1.0%と僅かではあるが増加した。

また、延べ宿泊客は、813,000人となっており、

前年の728,900人に比べ、84,100人、11.5%の増加となり、観光客入込は堅調に推移しております。これは、温泉と自然を売り物にしている当町の観光にとって天候も好天に恵まれたため、観光客が増加したものと思われる。また、宿泊客の居住地別を見ると、宮城県内が60%、次いで関東地方が20%となっている。観光客の動向及び様子は、かつての団体から小グループあるいは家族旅行者が大半を占め、その内でもシルバーの入り込みが多く感じられる。

●鳴子町における保養資源の状況

鳴子温泉郷の現状は、昔ながらの湯治旅館から近代的な施設を持つホテルと観光客のニーズに合った経営形態で営業されている。

営業形態の内訳は、ホテル 6軒、旅館 65軒、寮 保養所 8軒、民宿 3軒、ペンション 11軒、国民宿舎 2軒で合計95軒となっており、これら全ての収容人数は9,271人となっている。また、豊富な湯量を活かし、各地区ごとに公衆浴場及び共同浴場があり、町長が推奨している温泉のはしごも出来るようになっている。

●町内の公衆浴場・共同浴場

【公衆浴場】

- ・ 滝の湯(鳴子温泉)
- ・ 早稲田棧敷湯(鳴子温泉)
- ・ すば鬼首の湯(鬼首温泉)
- ・ 目の湯(鬼首温泉)
- ・ 川渡公設浴場(川渡温泉)
- ・ しんとろの湯(中山平温泉)

【共同浴場】

- ・ 不動の湯(上鳴子地区)
- ・ しのめ共同浴場(湯元地区)
- ・ 稲門湯(新屋敷地区)

- ・ 多賀の湯(新屋敷地区)
- ・ 大畑共同浴場(大畑地区)
- ・ 末沢共同浴場(末沢地区)
- ・ 赤湯共同浴場(東鳴子地区)
- ・ 中野共同浴場(中野地区)
- ・ 川東共同浴場(川東地区)
- ・ 橋元共同浴場(川東地区)
- ・ 原共同浴場(原地区)

【足湯】

- ・ ホットパーク内
- ・ 鳴子温泉駅内
- ・ 鳴子峡内
- ・ 他に個人で設置(2ヶ所)

観光資源としては、四季折々に美しく変化する自然景観の他に、国等指定の文化財・名勝の他、史跡名所及び鳴子に縁のある歌人の歌碑などが存在する。

●温泉地としての問題点と課題

温泉について

平成16年12月10日に、鳴子町観光審議会より「町内源泉の管理について」の答申がなされた。【答申内容】

鳴子温泉郷は、町有源泉をはじめ民間源泉所有者の源泉管理が、将来にわたって安定的に管理運営される状況にはない。それは町有源泉を管理運営している温泉事業所の職員の定年を3年後に控えているが、後継者としての技術者が育成されていない。また、地元業者も3社あるが後継者難にある。さらに温泉(源泉)は観光産業の根幹をなしており、源泉所有者は特殊な産物(各源泉の特性が異なる)なので、地元業者への依存度が高いなどが背景にある。

当審議会としては、町有源泉をはじめ将来的には

民間の源泉管理と、市町村合併も視野に入れた取り組みについて協議した結果、大崎地域における特殊な産業形態をなす温泉地鳴子町が、地元の管理運営体制の確立によって、安定した温泉の供給とサービスを提供が可能になると考えられる。また、まちづくりの中で温泉資源の有効活用の検討や各源泉のカルテ作成により各源泉の異なる特性を包括的に管理することができる。そして、経費削減と将来に向けた取り組みを可能にするためには、まず町有源泉の管理運営会社(例えば、鳴子まちづくり会社内)を立ち上げる。町は、現在ある温泉事業所を管理運営会社に譲渡し、すべての町有源泉の管理運営部門を切り離す。管理運営は町との管理運営委託契約により管理運営会社が引き継ぎ、源泉等の管理運営の中で温泉知識と技術育成をはかり、技術者の確保と将来の民間需要への対応基盤を早急に確立することが望まれる。

以上の答申により、町が行っていた温泉業務は、平成18年度より鳴子まちづくり株式会社を指定管理者として管理運営を行っていただくことになっている。しかし、それ以外の答申内容は今後の課題となっている。

●鳴子温泉郷全体の課題

温泉の湧出量、種類ともに我が国有数の温泉地として有名であるが、平成の初め頃を境に入り込み客数は大きく減少している。豊富な温泉と既存の宿泊施設が充実し公共交通機関にも恵まれている中、変化・多様化するニーズへの的確な対応と滞在性を高め、また、リピーターや高齢者等の幅広い世代を惹きつける魅力をつくる大きな課題と考えられ、今後は温泉・温泉施設を楽しむだけでなく、温泉街・各地区を楽しむことへ視点を今まで以上に広めた魅力的な環境づくりが必要である。

2 温泉病院と温泉旅館との連携による新しい形での湯治の復活を目指す地元の取り組み

一鳴子温泉の湯治文化にもとづく温泉療養プラン 温泉病院サイドの支援

① 温泉と湯治文化について

鳴子温泉は、文献的には 1182 年の頃、平泉の藤原氏によって鬼首が開湯、18 世紀前半、川渡大湯・赤湯御殿湯が仙台藩の御用湯となり、寛政 3 年(1791 年)に林子平が川渡の湯につかったのを皮切りに、天保 11 年(1840 年)、伊達斉邦(12 代)が同じく川渡へ、また、文久 3 年(1863 年)、伊達慶邦(13 代)夫人が赤湯へと、藩主並びに藩主夫人の来湯があった。当時、温泉は一般に「出湯(いでゆ)」と呼ばれ、湯治を目的として利用されることが多かった。残存する金山下代記録(寛政 11 年版)によれば、年間の客数は、川渡(川渡)が 8,000 人、滝の湯(鳴子)5,000 人、荒湯(鬼首)5,000 人となっている。また、昔から「かけ(脚気)川渡、たんせき(胆石)田中、しょうかち(瘡)赤湯、せんき(疝気)車湯、かさ(瘡)鳴子」と謳われるほど、経験的効果があったとされている。

② 温泉療養プランの成り立ち

湯治客を中心とする宿屋は、足腰の病に苦しむ多くのお客様がたに支えられてきた由緒ある湯治場である。当然のように、病気やリハビリテーションまたは入浴法についての問い合わせが多く、また、病院内でも脳卒中リハ患者さんや整形外科疾患で悩んでいる患者さんが、外来で温泉リハを施行し、在宅に戻りたいという希望者が多くなり、当院と町内の開業医の先生がた、観光協会とで話し合いが持たれ、後述する温泉療養プランができあがり、実施に踏み切った。

その後、平成 14 年 6 月、鳴子町観光協会定時総会で温泉療養部会設立を宣言し、当初は 8 軒の旅館でスタート、会議、勉強会、視察を重ねて、平成 14 年 12

月に町内の全宿泊施設に参加を呼びかける説明会を開催、平成 17 年 12 月現在では 19 軒の宿泊施設が参加している。

③ 温泉療養プランとは

湯治旅館が一致団結し、町立鳴子温泉病院と提携した「温泉療養プラン」を打ち出した。これは、19 軒の参加旅館が、入院には至らないような生活習慣病や腰痛、リウマチ性疾患、脳梗塞や交通事故等による後遺症のリハビリテーションなどを希望するお客様に対し、鳴子温泉病院への通院の便宜を図るというもので、健康保険対象外の脳ドックも受け付ける。

病院の予約はすべて旅館側が引き受け、診療申込書と健康保険証をあらかじめファクシミリで送って、事前にカルテを作成しておいてもらう。病院では、プラン利用者のために毎週水曜日の決まった時間を診察に当てており、通院のための送迎も旅館側が行い、待ち時間がなく、余裕を持ってゆっくりと診察が受けられるシステムとなっている。

「温泉療養プラン」開始後 1 年間は県内をはじめとした近隣の在住者が多く利用していたが、平成 15 年度以降は東京都など関東地方在住者の利用が多くなっており、リピーターも増加している。

④ 温泉療養の今後

第 68 回日本温泉気候物理医学会総会(群馬県草津町)では、『温泉を科学する』のテーマのもと、EBM(Evidence Based Medicine)による温泉効果の発表のいくつかがなされ、医学的温泉療法における科学的分析も進んでいることが強く印象づけられた。

また、さらにその先にある“wellness(ウェルネス)”の理念についての話し合いも持たれようとしてきている。そのような中であって、温泉を中心とした鳴子町が目指す理想郷への第一歩のパスポートは、歴史ある鳴子温泉の湯治文化と最新のリハビリテーション療法の共同作業であると考えている。

宮城県鳴子町役場（平成18年3月31日より大崎市に吸収合併）
宮城県玉造郡鳴子町字新屋敷65
Tel. 0229-82-2111

NPO 法人健康と温泉フォーラム
東京都渋谷区代々木4-59-3
Tel. 03-3320-8126 Fax 03-3320-0586 www.onsen-forum.jp

Copyright © 2006

Forum on Thermalism in Japan. All Rights Reserved.